

# 柿 生 文 化

柿生郷土史料館 情報・研究誌  
住所:川崎市麻生区上麻生 6-40-1  
柿生中学校内  
電話:070-1503-6401/044-988-0004  
<http://web-asao.jp/hp2/k-kyoudo>  
第152号



あけましておめでとうございます  
本年もよろしく願っています

柿生郷土史料館 館長／柿生中学校 校長 田中眞砂美

令和3年を迎え、皆様におかれましては、良い年をお迎えのことと存じます。昨年は、世界中を襲った新型コロナウイルスの感染拡大で、大変な年になりました。学校が3か月余りも休業になることなど、昨年のお正月には予想もなかった事態でした。止まったように感じられた時間の中で、息をひそめるような生活が続き、これからどんな世の中になるのだろう、と不安を感じた毎日でした。

しかし、元柿生郷土史料館相談役の板倉敏郎様には、「柿生文化」第144号「歴史の中に見られる感染症と人々」や第147号「現代に生きる祖先の知恵～先人の知恵を現代科学が証明する～」を寄稿していただき、今、起きていることは、歴史の中で繰り返されてきたことであり、また、人々は、その困難な中でも、心と体を健康に保つために様々な知恵と工夫を凝らし、乗り越えてきたことを、柿生の歴史の中に見出すことができることを教えていただきました。

8月には、郷土史料館役員会が再開し、通常の開館も行われるようになりました。開館日以外にも、様々な方に来館していただき、史料館を見学していただく中、10月には、柿生郷土史料館は開館10周年を迎えました。11年目にあたる本年も、地域の皆様と共に、歴史に学びながら、着々と歩いていきたいと存じます。

本年は、辛丑(かのとうし)の年。丑年は、耐える、そして発展する、と言われている年だそうです。人々の英知は、この現在の状況を耐え忍んでいるだけではなく、その間にも、様々な取組で社会が工夫に満ちて発展していく予感がします。本年も、皆様のご活躍をお祈りするとともに、素晴らしい年となりますよう、お祈り申し上げます。

## 柿生郷土史料館 事始め(2)

～多くの人々に支えられたタタラ製鉄実験～

板倉敏郎 (元柿生中学校校長 元柿生郷土史料館相談役)

時は、平成21年(史料館落成の1年前)秋頃からのことです。

以前、元柿の実幼稚園園長の小島一也氏が「麻生」地名と鉄の関係で岐阜県美濃加茂市七宗町の上麻生の例について話をされていたことをよく記憶しています。

全国の「麻生」地名を調べてみますと、茨城県麻生町、埼玉県秩父郡大滝村麻生、群馬県多野郡万場町麻生、千葉県印旛郡栄町麻生など「鉄」に関わる歴地・地形・地名・伝承等数多くの関連性があることが判明しました。

確かに川崎市麻生区の隣接地、横浜市青葉区「鉄(くろがね)」「黒須田」、町田市「金井」、麻生区内では「金程」「金井原」古くは「タタラ川」などの地名が見られます。

また鶴見川流域には数多く見られる「杉山神社」を建立した忌部(いんべ)氏の祖が「天目一箇神(あめのまひとつのかみ=一つ目の神)であり、この神は製鉄の神と言われています。

このようなことから、麻生区に残る製鉄関連事項をもっと調査してみようということになりました。調べてみますと、「鉄町」の畑地に製鉄の時に出る鉄滓(不純物)が発見されていること、鶴見川流域のいくつかの遺跡から、製鉄に使用する吹子(ふいご)の空気を送る管状の土器(羽口=はぐち)が発見されていることも判明しました。

後は砂鉄の産出量が多い場所があるかということ。製鉄関連河川名と考えられる黒須田川(くろすだ=くろすなが転化した=砂鉄)が鶴見川と合流する地点(青葉区鉄町)の県立市ヶ尾高校裏手付近が砂鉄の産出量が最も高いことがわかりました。(以下4頁上段へ続く)

鶴見川流域の中世  
その12

## 源頼朝の嫡男誕生に鳴弦の役を果たした師岡重経

中西望介(戦国史研究会会員・都筑橘樹研究会会員)

保元の乱の顛末を描いた『保元物語』には、源義朝に従った各地の武士の名前が列記されている。ことに武蔵国では武蔵七党と呼ばれた児玉、猪俣、村山、西などの武士団ごとに多くの武士の名前が書き挙げられているが、その中でひときわ目を引くのは高家と書かれた秩父平氏の河越・師岡である。高家は「党の者ども」と呼ばれた武蔵七党とは区別された別格の家柄を指している。河越氏と並び高家と称された師岡氏とはどのような武士であろうか。

師岡氏は鶴見川下流にある師岡を本拠地とした武士である。師岡は古代の久良岐郡師岡郷に由来し、現在の横浜市港北区師岡町はそれを継承されたと見られる。寿永二年(1183)の源頼朝寄進状で、鶴岡八幡宮に「武蔵国師岡保内大山郷」が寄進されており、この大山郷は鶴見郷の別称と見られている。貞治六年(1367)沙弥至中所領讓状案に「武蔵国師岡保小帷郷内名田在家等地頭職」と見え、小帷郷は保土ヶ谷区小帷町に比定される。応安元年(1368)洲崎明神社に奉納された梵鐘銘に「武蔵州師岡保青木村洲崎大明神(以下略)」と見え、青木村は神奈川区青木町に比定されるので、師岡郷・鶴見郷から青木村・小帷郷に至る広い範囲に師岡保が成立していたことがうかがえる。鶴見川と江戸湾の水上交通を活用できる地理的位置にある師岡に着目して河越氏は一族を送り込んだのであろう。

さて、師岡重経は秩父平氏河越流の一族とされているがそのことを記した系図は少ない。大正2年(1913)に刊行された渡辺世祐・八代国治共著『武蔵武士』では河越重頼の弟としている。「正宗寺本 諸家系図」では秩父二郎大夫重隆一重仲(師岡三郎)一重経(佐兵衛)が見える。この系図によれば重隆の子息重仲がはじめて師岡三郎を名乗り、その子息重経は佐兵衛尉重経と名乗っている。師岡重経は河越重頼の従弟に当たる事になる。いずれとも断定は出来ないが、師岡重経が河越重頼と同世代であり、平安時代末期から鎌倉時代初期に活躍した秩父平氏河越流の一族であることは事実であろう。

師岡兵衛尉重経は『吾妻鏡』寿永元年(1182)八月十二日条に源頼朝の嫡男頼家誕生に際して鳴弦の役を果たしている。十一日の晩に御台所(北条政子)に出産の気配があると知らせをうけて頼朝も比企氏館に駆け付け、在鎌倉の御家人らが衆参した。在国の御家人も続々と鎌倉に参上した。無事な出産を祈願して奉幣の御使者を、伊豆箱根両所権現ならびに近国の由緒ある宮社に遣わしている。期待と緊張が高まる中で、無事男子(頼家)が誕生した。頼朝にとって後継者となるべき男子の誕生である。この時の祈祷は専光坊阿闍梨良暹と大法師観修、鳴弦の役は師岡兵衛尉重経、大庭平太景義、多々良権守貞義、引目の役は上総権介広常であったと『吾妻鏡』は記している。※この時すでに重経は兵衛尉に任官していたのか、吾妻鏡編者の誤記なのか疑問が残る。検討課題である。

鳴弦の役とは弓に張った弦を手や矢で弾いて鳴らし、発した音で悪霊・邪気を払う祈祷法で、平安時代、皇子誕生の湯浴の際に、前途の安寧を祝して漢書を読み鳴弦をした(『日本史広辞典』)。重経にとっては頼朝政権の晴れがましい舞台上大庭景義や上総介広常という実力者と並び大役を果たしたのである。頼朝政権内での重経の地位の高さをうかがい知ることが出来る。しかし、重経の栄光はここまでだった。『吾妻鏡』文治元年(1185)四月十五日条では、頼朝の推挙を得ずに勝手に朝廷から官位を得た20数人の御家人と共に、兵衛尉に任官した重経は頼朝に厳しく叱責されている。これは頼朝が武家の棟梁として御家人を統括するためには朝廷の関東御家人に対する直接支配を排除する事が不可欠であったからである。

さらに、一族の惣領である河越重頼が、義経の謀反に連座して処刑されて本領を没収されるという事件が起きる。こうした事が影響したのであろう重経の地位も低下したようだ。文治五年(1189)鎌倉を出発する藤原泰衡討伐軍の隊列の後ろに重経の名前が見える。また、建久六年(1195)頼朝が上洛して東大寺再建供養に臨む随兵の隊列の末尾に師岡次郎が記されているが、この記事を最後に『吾妻鏡』から師岡氏の名前は出てこなくなる。それから百年後の徳治二年(1307)円覚寺で毎月四日に行われる北条時宗忌日の大齋結番衆に諸岡民部五郎の名前が見える(「円覚寺文書」)。師岡氏は北条氏の被官(家臣)として命脈を保っていた。(つづく)



図 鳴弦「北野天神縁起」

シリーズ  
教育の歩み 第3部

## 日本の学校と教育(8)

小林 基男(柿生郷土史料館専門委員)

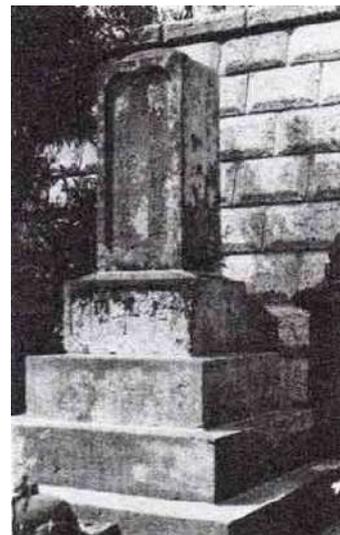
## ◆柿生地域の初等教育◆

前号で記したように、全国レベルでは初等教育の普及率は決して高いとは言えない状況にあったのですが、柿生地域の状況はどうだったのでしょうか。ここで言う柿生地域とは、片平村、五力田村、古沢村、万福寺村、栗木村、黒川村、上麻生村、下麻生村、早野村、王禅寺村と岡上村の11ヵ村を指します。このうち岡上村を除く10ヵ村は、1889(明治22)年の町村制の施行により、合併して柿生村となり、岡上村と柿生村外1ヵ村組合として一つの行政単位を構成していました。柿生村は1939(昭和14)年4月1日付けで、岡上村と共に川崎市に編入されたことで元の10ヵ村に戻り、今日に至ります。

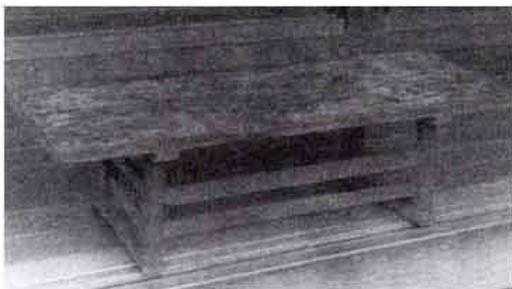
1872(明治5)年に公布された学制を受け、神奈川県ではおよそ300戸を「1小学区」としましたが、従来からの村同士の付き合いなどを勘案して、「1小学区は凡そ600人の人口として区切っても良い」と指示してきました。当時の柿生と岡上を合わせた戸数は545戸、人口は凡そ2,900人でしたから、戸数を単位とすれば、下等小学校2校、人口を単位とすれば5校が必要ということになりました。

現在でこそ、柿生地域は都市近郊の住宅地域として人口増が続いていますが、宅地化の波が及んできた1960年代半ば以前の柿生地域は、人口変動の少ない純農村地帯でした。そんな柿生地域で、明治新政府が発した学制の公布は、どう受け取られたのでしょうか。明治5年~6年にかけての村別の世帯数が、当時の戸籍簿(壬申戸籍)によって分かっています。それによると、片平村68戸、栗木村32戸、黒川村57戸、五力田村16戸、古沢村17戸、万福寺村17戸、上麻生村75戸、下麻生村31戸、早野村49戸、王禅寺村(裏郷の真福寺を含む)126戸、岡上村49戸の545世帯でしたが、家業の手伝いが可能な働き手である6歳以上の子ども達を、学校に通わせなければならなくなることに、強く反対することも、暴動を起こすこともありませんでした。それどころか早くも布告の出た翌年の1873(明治6)年に片平学校、下麻生学校、岡登(岡上)学校の3校、翌74(明治7)年には、黒川支校(明治14年から黒川学校)と上麻生学校の2校と、5校もの下等小学校が開校しているのです。(校名が〇〇学校となったのは、明治8年6月29日からで、それまでは〇〇学舎と呼ばれたのですが、ここでは煩雑を避けるために学校としました。)

何故こうしたことが可能だったのか。それは禅寺丸柿や生糸生産、そして冬場の炭焼きなど、商品生産の活発化により、農民たちの間にも、読み書きとソロバンの必要性が理解され、幕末期にいくつもの寺子屋や私塾が存在したからにほかなりません。残念ながら開業の時期が正確に分かるのは、王禅寺と下麻生の地境に元治元(1864)年に開業した青戸塾だけなのですが、黒川村には市川長左衛門の市川塾、古沢村には、福昌寺に筆子塚があり、さらに古沢忠左衛門の古沢塾があり、片平村には修廣寺に寺子屋と共に高等教育の役割を担った「夏菟山共同塾」が開かれていました。上麻生村には鈴木八郎右衛門の鈴木塾が、岡上村には梶六郎右衛門の梶塾がありました。王禅寺村、下麻生村、早野村では、まず文化・天保年間の開業と思われる久保倉次郎右衛門の久保倉塾があり、同塾閉塾後の嘉永6年頃、久保倉塾を継ぐかのように下麻生と王禅寺の子ども達を対象にした小島源左衛門の南嶺堂(塾の正式名称が分かっているのは、ここだけです)が開業し、



南嶺堂 小島源左衛門先生の筆子塚



早野の落合塾で使われていた学習机

ほぼ同時に早野村に落合四郎兵衛の落合塾が誕生、その将来を南嶺堂の小島源左衛門に見込まれ、門弟を譲られて元治元年に青戸四郎右衛門の青戸塾が誕生しています。世帯数にして550戸弱の地域に、7.8ヶ所もの寺子屋があったのです。

学制発布後、僅か2年程の間に、5校もの下等小学校がスタートできたのは、子弟の教育に熱心なこの地域の村民意識に支えられての事でした。なぜなら教育にかかる経費をどう負担するかは、全て府県に、さらには市町村にと丸投げされたからです。当初はお寺や神社、場合によっては寺子屋の師匠の居宅などを借用してのスタートでしたが、それは自前の校舎を建てるまでの仮住まいに過ぎません。校舎の建築費と維持費、先生の給与にその他経費。負担すべき費用は大変多かったのです。各村々は何度も議論を繰り返しましたが、学齢期の子を持つ世帯だけでなく、村全体で教育費を負担することにして、5校もの下等小学校を作ったのです。(以下次頁)

(1頁から続く)早速、生徒諸君に呼び掛けてみたところ、陸上部・柔道部のメンバー約20名と顧問の松崎先生、黒川先生も集まり、小島一也氏(当時御年80代半ば)も含めて20数名の参加で毎週土曜日・日曜日に毎回約3時間近くの作業が始まりました。秋の終わり頃から冬にかけては水温も低く大変つらい作業が続きました。砂鉄は川の増水後に採取するとたくさん採れることも分かりました。このようにして約40Kgの砂鉄を採取することができました。

一方、製鉄については、東京都千代田区北の丸公園の科学技術館の広場で行われたタタラ製鉄の実験に参加しました。東京芸術大学の永田和宏氏、東京大学の石井隆昭氏より指導を受け、柿生の砂鉄の分析やタタラ炉の作製方法も伝授していただきました。さらに有り難いことに、タタラ実験当日に柿生中にお越し頂けることになり、大変心強い思いでタタラ製鉄実験に臨むことができました。先生方本当にありがとうございました。

平成22年3月20日、晴れ。他大学の先生方や新日鉄研究所の方々も参加頂き、地域の方々約25名、生徒30名、柿中職員10名の参加。午前10時、製鉄神の「金屋子神」に実験の安全と成功を祈り、10時30分火入れ開始、一定間隔で炭と砂鉄を交互に投入、約6時間近く間断なく続けました。



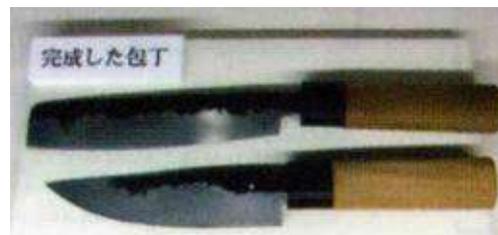
得られた玉鋼

午後4時過ぎに全工程終了。実験は見事に成功し、約4Kgの玉鋼(たまはがね)を得ることが出来ました。永田教授も大変良質の玉鋼の出来栄えに感動されていました。

玉鋼の抽出に続いて、玉鋼を精製して刃物づくりの作業が課題となってきました。小型でもよいので日本刀を作製することも考えており、鎌倉の政宗工房(名刀岡崎政宗の工房)に、無理を承知でお願いに行ったところ実に快く受け入れて下さいました。それも、中学校の活動に理解を示していただき、「無料で行います」とのお話でした。しかし、問題は別の工房で行う研ぎの段階でかなりの費用がかかること、実に残念でしたがこの話は断念することになりました。でも政宗工房さんの心意気には感謝いたします。

そこで、地元、東百合丘の松沢鉄工所さんに駄目元でお願いに行ったところ、こちらも大変快く引き受けて下さったのです。日本刀は無理だが包丁なら出来ますとのご返事で大変うれしく思いました。10月31日、松沢さんは日曜日にもかかわらず、社員の方総動員で、それもボランティアで受け入れて下さいました。

作業は郷土研究チームの生徒20名も参加して各工程に参加して作業に加わりました。現在柿生郷土史料館展示室に展示されている包丁2丁はこの時のものです。



今回のタタラ実験の成功は、生徒諸君を始め、研究者の方々、工房・鉄工所の皆様、地域の皆様、柿中諸先生方と大変多くの方々のご支援とご協力の賜物と感謝しております。柿生郷土史料館の設立の裏にはこんなにも多くの方々の思いと協力があったということも忘れてはいけない事と深く感じております。皆様ご協力ありがとうございました。

(3頁から続く)当初の下等小学校は、ともかく寺子屋を師匠と子供たちをそのままに、看板をかけ替える形で出発したのですが、片平学校の場合、片平村ばかりでなく、世帯の少ない古沢、五力田、万福寺の3ヶ村と栗木村の一部子ども達も含めましたので、古沢塾の塾生たちも通ってきました。そこで、大勢の生徒を収容できる修廣寺に間借りする形で開校しています。ただ、子どもたちの教育に熱心な大人の多い柿生地域でも、学齢にある子どもたちが当初から全員通学したわけではなく、明治6年7月時点の片平村の就学生は、男児22名、女児13名の35名に留まり、男児15名、女児32名の47名は、なお不就学と就学率は43%に留まっていたのが現実でした。懸命な就学奨励が行われた結果、同年12月までに男児2名、女児7名が就学し、ようやく就学率は5割を超えたのです。

参考(森潤一編『柿生の教育の歩み』、柿生郷土誌刊行会編『ふるさとは語る』)(続く)

## 柿生郷土史料館催物案内 【参加自由、入場無料】

◎開館日:奇数月は毎日曜日、偶数月は毎土曜日 (原則として月4回)

**1月** 10・17・24・31日(毎日曜日)

**2月** 13・20・27日(毎土曜日)

◎開館時間:午前10時～午後3時

(1月3日、2月6日は休館です)